

旧機那サフラン酒本舗 「鍍絵」調査

Survey of "Trowel Paintings" at the former Kina Saffron Shu Brewery

津村泰範 / 平山育男

TSUMURA Yasunori / HIRAYAMA Ikuo

キーワード
鍍絵、機那サフラン酒本舗、修復方法

Keywords
Trowel Paintings, Kina Saffron Shu Honpo Brewery, Restoration method

Mr. Seitaro Takada, president of Mirai Hakko Honpo K.K., and Mr. Juntaro Tsuru, chairman of the Citizens' Association for the Preservation of the Kina Saffron Shu Brewery, requested a report on the damage to the trowel paintings and a survey of restoration methods for the former Kina Saffron Shu Brewery (a nationally registered tangible cultural property built in 1926), owned by Nagaoka City. Therefore, we conducted a survey of the "trowel paintings" at the former Kina Saffron Shu Brewery.

As a result of our research, we determined that it is best to maintain

the trowel paintings as much as possible in their current state based on their age and to halt their deterioration, and we proposed the content of our search for a method to achieve this goal. We informed the client that the cooperation of Mr. Maekawa of the National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo in researching the conservation and restoration of trowel paintings was a prerequisite for the implementation of this proposal. We would like to continue to conduct practical research to test the hypotheses presented here.

はじめに

長岡市が所有する旧機那サフラン酒本舗「鍍絵蔵」(国登録有形文化財・大正15(1926)年建造^{*1})について、ミライ発酵本舗株式会社の高田清太郎社長と、機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会の水瀧潤太郎会長より、鍍絵の破損状況の報告と修復(方法の検討)に関する調査依頼が長岡造形大学へあった。

そこで、機那サフラン酒本舗「鍍絵」調査を、令和3(2021)年8月25日～令和4(2022)年3月31日の期間で行った。プロジェクトは、平山育男、津村泰範、西澤哉子、梅嶋修が担当した。また、本稿は、「長岡造形大学デザイン研究開発2021年度報告書」に掲載した内容に、一部加筆修正を加えたものである。

1. 鍍絵保存の取り組み等の調査

令和3年12月4日～5日に、大分県宇佐市安心院町の安心院地域複合支所多目的ホールにおいて行われた「全国鍍絵サミット in 宇佐」で、機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会の平沢政明事務局長が「鍍絵蔵」について発表する機会があった。鍍絵保存の取り組みの調査の一環として、この催しに津村が同行した。

『鍍絵放浪記』(石風社、2001年)の著者である写真家の藤田洋三氏が、その著書の中で紹介した日本全国の鍍絵は、明治中期から昭和初期に施されたものが多く、その分布には地域的な偏りがある。ここは鍍絵の文化があった代表的な地域の方が集まって、文化資源・観光資源としての鍍絵の現在と将来について語り合う場だ。コロナ禍もあり当初の予定から2回延期となったものの、そのせいもあってか、活気のあるシンポジウムが行われた。

4日のトークライブ「鍍絵の魅力～鍍絵の様々な見方～」は、コーディネーターを別府大学文学部史学・文化財学科の段上達雄特任教授が務め、安心院町出身で京都国立博物館の宮川禎一考古学研究員が京都で発見した鍍絵事例を、建築家・建築史家で江戸東京博物館館長の藤森照信東京大学名誉教授が国内の鍍絵全般の歴史を、地元の彫刻家辻畑隆子氏が鍍絵からいただくインスピレーションを、あじむ鍍絵保存会会長の上鶴養正氏が安心院における鍍絵の保存活用状況を説明した。平沢氏の話提供は、「鍍絵蔵」の紹介ではあるが、現在の状況を「悲しい現実」として示し、経年した鍍絵を如何にして将来に継承するかを会場に問う問題提起であった。安心院では、地域資源として大切な

鍍絵の施されている建物の存続が危ぶまれた際に、鍍絵そのものを壁ごと切り取って移設して展示的に残す試みをしていることが特徴的であった。話題提供後のトークの中で会場にいた津村も指名を受け、鍍絵そのものを如何に保存継承していくかの(保存)修復手法の検討が喫緊の課題であることを会場に共有した。

その後の公開討論では、「鍍絵でまちおこし～全国各地の様々な活動～」ということで、引き続きコーディネーターを別府大学の段上達雄特任教授が務め、各地のゲストが地域での活動を紹介した。伊豆長八作品保存会会長、浦賀探訪くらぶ代表、射水市観光ボランティアつづじの会会長、石見伝統建築文化研究会会長、えひめ鍍絵の会会長、地元安心院町の鍍絵作家永田知徳氏が、それぞれの地域で自身の所属する団体を中心に守り伝えていく状況を紹介した。その中でもやはり安心院町は特徴的で、平成に入ってからの「鍍絵文化の再発見」により、新たに制作する「平成の鍍絵」の活動が目立ち、新鮮ではあった。もちろん建物そのものが朽ちてしまっているため鍍絵部分を緊急避難的に切り取って保存をする手法を逆手に取った感じではあった。

5日の「鍍絵めぐりフットパスウォーキング」にも参加をした。街なかから離れた農村部に点在する鍍絵をバス移動と山歩きで巡る仕立てであった。安心院の鍍絵は、「練り込み技法」と言って、白壁の漆喰を塗った後、絵を立体的に盛り上げて塗り、漆喰に色を混ぜた色漆喰をさらに塗る技法となっている。風化しないことが特徴というが、顔料を漆喰に練り込むので、全体的に明度が高く淡い色調となっている。4日の会場でもあった集合場所の安心院地域複合支所の一角には鍍絵についての展示があり、ボランティアガイドが解説をした。ツアーでは、外部では戸袋や妻壁、寺院の内部では小壁にある鍍絵を鑑賞した。その後、地図を参照しながら安心院の鍍絵の集積地である街なかを散策した。

以下に代表的なものの写真を挙げたが、その場には残せない状況下にあった鍍絵を掲示板のように残している例や、その鍍絵とは直接的には脈絡のない別の建物の壁につけている事例も少なくなく、キッシュに見えた。また平成の新作も確認した。技術の伝承という意味では大事だが、かなり現代的なアレンジが加わっており、サイディング壁の上に、室内制作の鍍絵パネルをビス留めで貼り付けるような状況を見ると、いろいろと考えさせられた。「練り込み技法」で風化の進度が遅いこともあり、鍍絵そのものの保存処置をしているものは皆無

に近い。「鏝絵蔵」の鏝絵修復に直接的に参考になるものは、残念ながらなかったと言える。ただ、鏝絵そのものは保存されており、手法のバリエーションの一つであることは否めない。(fig.1～4参照)

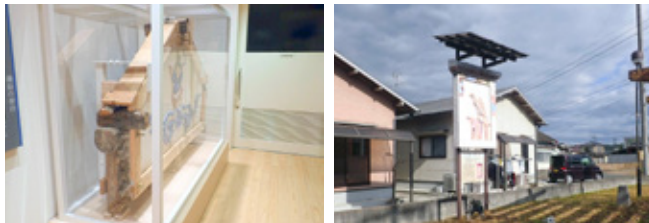


fig.1 (上左) 鏝絵の切り取り保存展示(裏側の細工が分かる)

fig.2 (上右) 明治23 (1890) 年の鏝絵の切り取り保存



fig.3 (上左) 市指定史跡重松家別邸の明治17 (1884) 年の鏝絵

fig.4 (上右) 昭和初期モダンな旧写真館の壁に貼られた平成の鏝絵

2. 鏝絵修復に関する既往研究の調査

具体的に鏝絵そのものを修復した事例について、既往研究を調査した。『建築史学』1993年21巻119-123、今井成享「<修復トピックス>入江長八の鏝絵技法 重要文化財 旧岩科学校校舎の修理工事を通じて」は重要文化財建造物の鏝絵についての報告であるため、以下にその概要をまとめる。

明治13 (1880) 年に建てられた木造小学校建築である旧岩科学校校舎は、平成4 (1992) 年12月に根本修理が完了した重要文化財建造物である。この建造物には、近代に伝播した鏝絵の創始者と位置付けられている左官の入江長八の手による鏝絵が備わっている。ここでは、修理工事に際し、壁補修に伴う詳細な技法調査を行った。その結果、入江長八の鏝絵の技術は、左官技法と彩色技法の融合した技法であると、以下のような特徴を挙げる。

- ①壁に着色または絵を描く。
- ②絵は立体的に盛り上げる。高く盛り上げる場合は漆喰を用い、少し盛り上げる場合は丹具(たんのぐ※顔料の丹と胡粉を混ぜたもの)で置上げる。
- ③模様を型押しする手法も用いる。
- ④顔料は、日本画と同じものを使用する。
- ⑤道具は、鏝と筆・刷毛を使用する。

ここでも、既存の鏝絵の保存を前提とした修理は行っていない。『重要文化財旧岩科学校校舎修理工事報告書』(平成5 (1993) 年3月、静岡県松崎町)によれば、基本的にはクリーニング(消しゴムや刷毛や歯ブラシを用い、水と家庭用中性漂白剤も併用)にとどめ、部分的な補修には左官技術ではなく接着剤を併用した補彩技術で対処している。内装であり破損が全体的に軽微であったため、ここでも「鏝絵蔵」の鏝絵修復に直接的に参考になることは、残念ながらあまりないと言える。だが、そもそも鏝絵そのものへの介入を極力しないように心掛けていけると言える。

3. 旧機那サフラン酒本舗「鏝絵蔵」鏝絵の保存状況調査

3.1 調査概要

調査は、あらかじめ損傷個所の確認をした。概ね経年による劣化であり、人為的な破損行為はないことを確認した。より詳細に状況の見分を行うため、専門家の協力を仰いだ。令和3 (2021) 年10月15日に、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所から中山俊介特任研究員、同文化遺産国際協力センター前川佳文主任研究員、同保存科学研究センター修復技術研究室中村舞アソシエイトフェローの3名に現地調査を依頼した。このうち特に前川氏は、保存修復士でもあるため、より具体的な方法を検討するのに最適である。鏝絵の修復技法研究に取り組み始めていることも好機である。(その成果は、東京文化財研究所令和3年度成果報告書『スタック装飾及び塑像に関する研究』にまとめられ、本稿に掲載された内容も所収されている。)

状況を熟知している平沢政明氏からの同蔵の保存に係るこれまでの取り組みについての概要説明を確認した上で、現状における鏝絵の保存状態及び損傷が認められる箇所に対する保存修復案について検討した。以下(3.2～5.)の記述は前川氏によるものである。



fig.5 調査状況

3.2 鏝絵の概要

「鏝絵蔵」に配された鏝絵は、大正15 (1926) 年に創業者である吉澤仁太郎からの依頼を受けて、左官・河上伊吉によって制作されたものである。蔵の鏝絵は計17箇所の扉や破風部にみられる。

3.3 鏝絵の技法

木造の土壁の軒下や扉に、漆喰を主材とし、盛り上げ技法を用いながら恵比寿や大黒天、動植物を立体的に表現している。制作に使用されている技法には、磨き上げや線刻、漆喰を盛り付けたのち曲線や直線を織り交ぜて雲や波の質感を表現するなど、様々なものが見られ、これらを組み合わせる画面が構成されている。また、一定の厚みをもつ箇所には漆喰の噛みつきを良くするために釘(洋丸釘)が芯材として打ち込まれており、動物の眼球にはガラス玉が埋め込まれるなど、随所に工夫が見られる。

鏝絵には彩色が施されており、色彩のコントラストが立体的な視覚効果を与えている。目視による調査では、2種類の彩色技法が用いられていると考えられる。ひとつは、白色漆喰の上にセッコ技法(顔料に展色材を加えて彩色する技法)による彩色であり、もうひとつは、漆喰に顔料を直接練り込んだ色漆喰を用いる技法である。

3.4 鍍絵の保存状態

全体的に著しい損傷は認められず、比較的良好な状態が保たれていることから、平成16(2004)年の新潟県中越地震の被災による損傷も軽微で、それ以降に実施された保存事業^{*1}やその後の部分的な補修作業による効果がかがえる。それぞれの鍍絵を個別に観察すると、局所的に損傷が認められる。ここでは鍍絵が配されている鍍絵蔵を北面、東面、南面の3面に区分して記載する。

●北面(鉢巻部：唐草紋様、上段左から：猪とススキ、虎と竹、鼠とおもと、牛と紅葉、下段左から：馬と桜、犬と牡丹、羊と菖蒲)

終日日陰に留まることの多い北面は、漆喰の剥離・剥落やセッコ技法による彩色の剥落が認められる(fig.6)。幾つかの鍍絵は、画面を構成する各要素(動物や植物など)のうち局所的に漆喰素地が露出しており、保存状態の良い他面の鍍絵と比較した場合、配色のバランスに違和感を覚えることから、制作当初は彩色が施されていた可能性が指摘できる。

鍍絵が配された扉の周辺では複数箇所亀裂が発生しており、部分的に剥離が起きている。また、鍍絵の周囲を取り囲み帯状に配された黒色顔料は、過去の修理で補修された痕跡が認められる。現在は、補修時に使用されたと思われる顔料が部分的に溶け出し、筋状の垂れとなって漆喰の表面に流れ出ている(fig.7)。

鍍絵において、釘を芯材として用いるなど一定の厚みをもつ箇所では、表面仕上げ層において漆喰の剥離・剥落が発生している(fig.8)。非常に危険な状態であり早急な保存修復処置が求められる。

鉢巻部の鍍絵は、剥落した箇所に復元的な修理の痕跡が認められるが、現存するオリジナルの表面仕上げとは異なることから統一感に欠ける。また、剥落を起源に発生したと思われる亀裂には充填処置が施されているが、亀裂悪化の抑制には機能しておらず、外観美を損なう(fig.9)。

●東面(鉢巻部：二匹の龍、上段左右：鳳凰雌雄一对、下段左：麒麟、下段右：玄武)

青色顔料による彩色が施された箇所では局部的に緑色化とも見て取れる状態が確認できる(fig.10)。仮にそうであるならば、藍銅鉱から作られる顔料である群青が使用された可能性が高い。しかし、制作の時点で意図的に青色顔料の上に緑色顔料を重ね塗りした可能性も否定できないことから、詳細を明らかにするためには科学的な調査が必要である。青色は異なる2種類の顔料が使用されたように見える。仮にそうであるならば、それらがオリジナルなのか、いずれか一方が後世に塗り重ねられたものなのかは明らかでない。また、湿度などの影響を受けて局部的に変質した可能性も指摘できる。

背景に用いられた黒色顔料は厚塗りであり、部分的に剥離しており、その剥離の形状から塗布する際に比較的高濃度の展色剤が混ぜられていたことが分かる。鍍絵の周囲を取り囲み帯状に配された黒色顔料は、過去の修理で部分的に補修された痕跡が認められる。この顔料が部分的に溶け出し筋状に垂れとなって漆喰の表面に流れ出ている。

2階扉の鍍絵周辺には、漆喰の剥離や剥落、亀裂が生じている。漆喰の剥落箇所からは、雨や雪の影響で溶解したと思われる土壁材が溶け出し、漆喰の表面に付着している(fig.11)。

漆喰の剥落箇所には部分的に充填処置が施されているが、周囲のオリジナル素材との調和がとれておらず外観美を損なう。

●南面(鉢巻部：唐草紋様、上段左：鳥と菊、上段右：兎と松、下段左から：恵比寿、大黒天、鶴と亀、番いの鶴と松)

概ね屋内の環境下にあることから、北面や東面に比べると、ほぼ完璧な保存状態を保っている。埃などの付着物は認められるものの、彩色層や漆喰層において緊急を要する処置が必要と考えられるような損傷状況は認められない。



fig.6 (左上) 彩色層の剥落 fig.7 (右上) 溶けて流れ出た黒色顔料



fig.8 (左上) 表面仕上げ層漆喰の剥離と剥落

fig.9 (右上) 過去の復元的修理跡と亀裂の充填処置跡

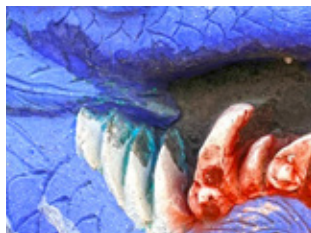


fig.10 (左上) 緑色顔料とトーン異なる青色顔料

fig.11 (右上) 漆喰の剥落と流れ出した土壁材

4. 「鍍絵蔵」鍍絵の保存修復方法の提案

4.1 総論

国内における鍍絵の保存修復については、適切な保存修復理念が確立されておらず、作品ごとにさまざまな手法がとられている。鍍絵を材質的に捉えた場合に、それらは国際的にスタッコ装飾と呼ばれる分類に属する。一般的に欧米諸国では、これらの保存修復には左官職人ではなく保存修復の専門家が処置にあたる。これは大前提としてスタッコ装飾箇所を明確に「文化財」もしくは「美術作品」として捉えていることに起因しており、今日、絵画作品が画家ではなく専門家の手によって保存修復されることに等しいといえる。

日本では、こうした分野の専門家に乏しいことから、左官職人によって修理される傾向が強みられる。しかし、鍍絵は細やかな表現や、ときに彩色が施されていることから、単に老朽化した壁を掻き落とし塗り替えるのとは異なり、左官技術とは異なる専門的な知識が必要となる。それを裏付けるように、国内の鍍絵では、修理方法や使用材料が原因となって損傷が進んでいる作品も少なくない。今後、その価値が見直される可能性が高い鍍絵だけに、「修理」とは一線を画した「保存修復」という視点で捉えた方針が十分に検討されることが望ましい。

4.2 鍍絵全体

表面に付着、堆積した埃を毛先の柔らかい刷毛で除去することが望ましい。埃は、ある程度の厚みが堆積すると湿気を含み、彩色を有する鍍絵であれば特に表層面の劣化を促す原因となる。

なお、この作業を実施するうえでは、彩色層や漆喰に剥離や剥落が発生していないか十分に調査する必要がある。発生が確認された場合には事前補強作業を施し、安全性を確保する必要がある。

4.3 鉢巻部及び各所扉上の装飾

同形状の渦紋文様の反復で造形がなされていることから、欠損した箇所（南面左角など）はオリジナルの形状に倣って修復することが望ましい。また、過去の修理で部分的に復元されている箇所は、接合面の処置や表面の仕上げに十分配慮しながら再処置を行う必要性が指摘できる。復元に使用する材料は、オリジナルの漆喰の性質に近いものが適しているといえる¹⁾。ただし、接合面における適合性を高めるため、その材質硬度はオリジナルを上回らないよう配慮する必要がある。

ひび割れが発生している箇所については、その幅が5mm以上である場合には、部分固定法などの処置²⁾を亀裂内部に施したのち、オリジナルの漆喰の性質に近い材料で充填処置を行うことが好ましい。充填材は、今後も歪みが生じる可能性があることから、負荷がかかった際にはオリジナルの漆喰よりも先に破損するような硬度に調整する必要がある。

4.4 鍍絵本体及び彩色

扉に配された鍍絵の周辺を額縁のように取り囲む漆喰は、過去にも塗り替えが行われている。今回の調査では、複数の扉でこの鍍絵の周辺箇所に剥離・剥落や亀裂が確認されたことから、その傷みが大きく進行している箇所については、掻き落としとして塗り替えることが好ましいと考えられる。逆に、それほど大きく傷みが進行していない箇所については、剥離が発生している場合には充填剤の注入による再接着を行い、周辺に動きがなく堅牢な状態を保っている漆喰に発生している亀裂は経過観察を行うことが好ましい。充填剤には水硬化石灰をベースとする修復材料の使用が好ましく³⁾、土壁と漆喰がもつ吸放湿効果の妨げとなるような合成樹脂の使用は避けるべきであると考えられる。

鍍絵において、盛り上げ箇所でも部分的に漆喰の剥離が発生している箇所は、和紙などを用いた表打ちで養生したのち、充填剤を注入して再接着を行うことが好ましく、充填剤には水硬化石灰をベースとする修復材料の使用が適していると考えられる⁴⁾。

一方、漆喰の剥落が発生している箇所では、今後の保存を考えた場合には、残存する漆喰の周囲にエッジング処置を施すことが好ましい。この時、オリジナルの形状が分かる場合には、復原しながら材料を配することでより耐久性の高い処置となる。また、鍍絵の制作時に漆喰の噛み付きを促すために打たれた釘頭が露出している場合には、酸化生成成分を抑制する効果をもつ腐食防止剤を塗布してから作業を進めることが好ましい。剥落箇所に使用する材料は、オリジナルの漆喰の材質に近いものが好ましい⁵⁾。

彩色に関しては、色漆喰が使用されている箇所については全体的に大きな問題はみられない。一方で、セッコ技法で彩色が施されている箇所については剥離が発生しており、剥落止めの処置を行う必要がある。鍍絵が屋外にあることや、長岡市の年間を通しての気候に配慮した修復材料を選択する必要がある⁶⁾。

彩色層が剥落した箇所は、現在、鍍絵を鑑賞するうえでの大きな妨げとなっていることから、補彩処置⁷⁾を施すことも選択肢のひとつとして考えられる。補彩技法には様々なものがあるが、当該鍍絵の状態が比較的良好であることと、オリジナル性を尊重した場合、中間色法を用いることが適切であると考えられる。この技法は、オリジナルの彩色よりも明度や彩度の低い色彩を配し、剥落して白抜けてしまった箇所のトーンを落とすことで全体的な統一感を生み出すものである。また、これと同時に補彩時に用いる展色剤により剥落箇所周辺の彩色層を補強する役割も果たす。多くの観光客が鍍絵を鑑賞するために訪れる現在の状況考えた場合、損傷によりやや秩序が乱れた状態にある鍍絵及び「鍍絵蔵」全体の統一感を再構築することは、ひとつの課題と言えるだろう。

5. 「鍍絵蔵」鍍絵の保存修復材料の提案

4. における下線部で記した番号とリンクさせ、各処置に適していると考えられる修復材料について、以下のように提案する。
- 1) 及び5) 消石灰+川砂（珪砂などの粒径の小さなもの）を体積比で1:1~1:2に練り合わせたもの。スサやフノリなどの添加物は必要ないとする。
 - 2) ひび割れの発生箇所の表層面から3mm程度の深さに、ビニール系樹脂（例：Vinavil、Vinavil S.p.A社製）を亀裂の両側の漆喰を繋ぎ合わせるように等間隔で少量ずつ打ち込み、硬化したのち充填材による処置を行うことが好ましいと考える。
 - 3) 及び4) オリジナルの材料との適合性及び空気に触れにくい漆喰層下で使用することに配慮して、水硬化石灰（例：PLM-A、C.T.S S.r.l.社製）を使用するのが適しているとする。
 - 6) ライムウォーターを噴霧するなど、無機修復材の使用が適しているとする。
 - 7) 屋外であることに配慮し、顔料に展色材としてカゼインアンモニウムを用いた補彩が適しているとする。

まとめ

「鍍絵蔵」の鍍絵群の経年を踏まえた現状を限りなく維持しつつ劣化を食い止めることが最善と判断し、その方法を模索した結果の提案だが、この提案を遂行するにあたっては、東京文化財研究所・前川氏の鍍絵保存修復に関する研究協力が大前提となる。

鍍絵の保存修復作業にかかる工期は6週間程度と予測することができ、その間は北・東・南面に仮設足場を設置し、他に工数30人日程度の作業補助員も要する。これらの費用及び作業に係る諸経費を予算化し、なるべく早急に準備を進めることを推奨する。また、全国的に見ても先駆的かつ重要な事例となるので、修復に係る詳細を記録した報告書を作成することを推奨する。

以上の内容は、現在、旧機那サフラン酒本舗を所有・管理する長岡市より管理の委託を受けているミライ発酵本舗株式会社と、その管理に協力をしている機那サフラン酒本舗保存を願う市民の会への回答となる。その後、長岡市が令和4年度より具体的に鍍絵蔵の鍍絵修復に向かう動きを始めたが、本研究は仮説にすぎないため、ここで提示した仮説を検証する実践的な研究が望まれるところであり、引き続き関与していきたい。

*1 梅嶋修/山崎完一：国登録有形文化財 機那サフラン酒製造本舗土蔵 修理工事について、日本建築学会北陸支部研究報告集 Vol.52、pp. 545-548、2009.7